

2024年6月2日

わたしがあなたがたを選んだ

ヨハネ 15：11～17

・愛に生きる掟として

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」と、イエス様は言われています。イエス様は、私たちに「互いに愛し合いなさい」、それも「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」との言葉と共に、私たちを互いに愛し合う道へと押し出しておられるのです。この言葉を改めてお聞きになって、皆さんはどういう思いを持たれるでしょうか。例えば、自分の命を捨てることで、鉄道の大事故を未然に防いだ塩狩峠の主人公のような姿を思い浮かべて、あのよう生きることをイエス様は言っておられると思われるのではないかと思います。そして、私もそうですが、恐らく多くの皆さんが、「いや、これはとても自分には無理だ」と思われると思うのです。イエス様の言われることは分かる。そして、その愛に生きることが大切であることも分かる。自分が少し痛むような愛で、他者を愛していくと言われれば何とか取り組むことが出来るかもしれない。けれども、「自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」と言われたら、とてもそこに生きることはできないように思うのではないかと思います。

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」というイエス様の言葉を聞いた時に、これは自分には無理とまずは思われると思います。そして、なかなか人を愛せない、そんな私であっても、神様は赦してくださいということで、このイエス様の言葉の前を通り過ぎていくようにも思うのです。けれども、イエス様は私たちに「掟を与える」と言われます。つまり、そこに生きることを、やはり求めておられるのです。勿論、イエス様は、私たちにとって実現不可能な、私たちの現実からは遠く離れた理想を語っておられるではありません。互いに愛し合うという道をどのようにして歩むのか、そして、互いに愛し合う歩みにおいて、私たちは一体何を受け取っていくのか、お示しくださっているのです。そのことを心において、私たちにとってまずは受け止め難いと思われるイエス様の言葉に、丁寧に聞いていきたいと思えます。

・喜びの言葉として

まず、イエス様は「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。」と言われました。「これらのこと」と

は、先週ご一緒に受け止めて来ましたように、イエス様に繋がって生きることです。そして、枝が幹から全ての栄養を受けて実をつけていくように、私たちもイエス様に繋がられて、イエス様が全ての力を受けて歩いて行く。そして、「わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。」とされていることなのです。

そして、今日は、私たちにとって決して容易くはない、むしろ、大変厳しく見えるイエス様の掟について見ていこうとしていますが、その最初にイエス様が言われる言葉が「喜び」なのです。それは、一体どういうことなのだろうか、まずは思わされたのです。つまり、イエス様は単なる厳しい戒律のようなものを語っておられるのではなく、喜びを語っておられるのです。そのことをまず受け止めなければならないと思わされました。

イエス様の「わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるため」とは、一体何を示しているのでしょうか。この言葉に続くようにして、「わたしがあなたがたを愛した」と言われるのです。ここまで来ると、イエス様が私たちに何をお伝えになろうとしているのかが分かるような思いがします。それは、「私はあなたを愛した」、この喜びなのです。イエス様が私たちを愛された、その喜びが、私たち一人一人の内にあり、それが満たされている、そのためにこそ、この「掟」が与えられているということなのです。

・「わたしがあなたがたを愛した」

そして、ここでのイエス様の「わたしがあなたがたを愛した」という言葉で、二つのことを確認したいと思いました。一つは、「私たちはイエス様に愛された」という事実なのです。12節に「わたしがあなたがたを愛した」とありますが、これは元の聖書の言葉に遡りますと、とても印象的な形になっています。これは「既に愛された」という字なのです。しかも、具体的に「愛された」という感じなのです。そして、その愛された状態が今も続いているような意味合いなのです。そうして受け止めてみますと、私たちは「既にイエス様に愛された者」なのです。イエス様は、私たちを愛してくださる、このことは、これから先私たちがどう歩むかということで、愛されるかどうか決まるということではない。既に私たちは愛されているのです。このことがまず示されていると思いました。

そして、二つ目として、この「愛した」は、「既に愛した」という意味ですが、更に丁寧に言葉を加えるとすれば、具体的なある瞬間に「愛された」という感じなのです。そして、その愛された状態が今も続いているような意味合いなのです。そうしますと、イエス様が「私たちを愛した」と言われるのは、単に「あなたを愛しているぞ」とおっしゃってくださるということだけではないことに気がつきます。そして、イエス様は

実際に私たちを愛する、言い換えれば、愛を行動として表されたのです。今弟子たちに向かって語っている時にはまだ起こっていないのですが、福音書を記したヨハネは既に起こったこととして受け止めているから、既に起こっていることといような言い方になっているのです。イエス様が私たち一人一人を愛された具体的な瞬間、それは、もうお分かりのように、イエス様が十字架で命を捨てられる時なのです。ですから、この「愛された時」とは、私たちにとっては「イエス様が十字架において命を捨てられた」時を指していると言ってよいと思います。

そうして受け止めて来ますと、この後のイエス様の言葉の意味も、明確になるではないかと思えます。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」、この言葉は、私たちに対して、人間の究極の愛の姿を示していると私は思っていました。しかし、ここまで示されたことを受け取ってきますと、まずはこの「友のために自分の命を捨てる」という言葉はイエス様の姿を示しているということに気がつかされたのです。イエス様は、私たちのために命を捨てられるのです。そして、そうして、私たちに対する大きな愛を示されたのです。その愛で、私たちは愛された者なのです。

・イエス様の友として

そして、「友のために」と言われています。まず受け止める必要があるのは、イエス様が私たちを友と呼んでおられることなのです。ここで「友」と言っておられることに、大きな意味があります。イエス様は私たちを「友」として扱ってくださる、それはどういうことを意味しているのでしょうか。友との対比で出てくるのは、僕、つまり奴隷です。そして、互いに愛し合う、その道をイエス様は私たちを奴隷としてではなく、友として歩ませると言われるのです。奴隷は、主人の命令によって、それを実行するのです。命じられたから歩まなければならない、それが全てです。主人がどう考えているのかは問題ではありません。しかし、友はそうではありません。友である以上、どうしてこういう言葉を与えるのか、ちゃんと伝える必要があるのです。そして、その思いを理解した上で、歩んで行くということです。そういう関係の中に、イエス様は私たちを置いてくださっているのです。

そして、ここで「友である」という言葉の後に、敢えて「わたしの命じることを行なうなら」と言われています。これは、何か「私の命令を聞くなら友人で、聞かないなら友人ではない」と言っているようですが、もっと深い意味を持っているのです。それは「私があなたを友としていることをどうしても受け取ってほしい」という切なる願いなのです。イエス様が私たちの友であること、そして、友である私のために命を捨てられたことは、なんとなく分かっていくということではないのです。そのために、どうし

でも通らなければならない入り口があるのです。それは、自分が持っていると思っている愛で、本当の意味で隣人を愛することはできないということなのです。そのことを知ることが、実は「互いに愛し合う」道の第一歩目なのです。

・愛なき者が愛の道を歩む

私たちは、「愛する」という言葉の前に立った時に、どうしたら自分の愛を大きくして、人を愛せるようになるか、命を捨てるところまで行くのか、そういうことを考えているのかもしれませんが。愛を大きくする、そのことで、イエス様の「互いに愛し合いなさい」という言葉に応えなければならない、そう思い込んでいるのかもしれませんが。しかし、イエス様は「あなたの愛を大きくして、愛そうという意志を強くして、互いに愛し合え」とおっしゃっておられるわけではないのです。むしろ、自分が持っていると思っている愛で愛することが出来ると思っている、それは幻想にすぎないことを、イエス様はここで明らかにしておられるのです。

そのことで、改めて今日の言葉は 15 章 1 節から続いている「ぶどうの木のとえ」に続いて語られていることに、心が留まりました。4 節で、イエス様ははっきりとこう言われます。「ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分で実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない。」と。つまり、イエス様は、あなたの方であなたの愛を大きくして、互いに愛し合う道を進めと言われているわけではないのです。そんなことは不可能なのです。自分自身の持っていると思っている愛では愛せないと知るところから、互いに愛し合う道は始まるのです。

では、どのようにして、私たちは自分の持っていると思っている愛で、本当の意味で隣人を愛することが出来ないということを知るのでしょうか。それは、実際に「互いに愛し合う」という言葉に向き合う時であると思います。私たちは「人を愛する」ということが大切であると誰もが思っています。「人を愛する」ことが必要ないと言われる方は、恐らくおられないと思います。これは人類共通の大切な戒めであると思っています。しかし、この言葉の本当の重さを知らされるのは、具体的な一人を愛するという事に立たされた時であると思います。そうすると、「愛する」とは、単なる理想では済まなくなる。生々しい現実になります。人を受け入れられないことも少なくない。時にはひどい言葉を言ってしまう時もある。助けようと思いつつ、手が出なかったということもある。そうして、「互いに愛し合う」という言葉に向き合う時に明確になるのは、「自分は人を愛することが出来ている」というような思いではなく、「自分はなんと乏しい愛しか持っていないのか」その実感ではないかと思えます。もし、離れ島で、たった一人で生活することが出来れば、自分の愛の乏しさという現実に向き合うことなく

生きていけるのかもしれませんが。しかし、私たちは人と共に歩むのです。その道において、自分の愛の乏しさ、自分の醜さを知らされるのではないかと思います。

しかし、そういう自分に向き合われることは、決して絶望ではないのです。その私たちに、このイエス様の言葉が響いてくるのです。「わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」、私たちがイエス様の「互いに愛し合いなさい」との戒めに応えて生きる道は、自分が持っていると思っている愛を大きくして、隣人を愛せるような人間になるということではありません。むしろ、愛なき者が愛に生きる道はただ一つ、イエス様から力を頂くことなのです。愛を頂くことなのです。そして、ようやく私たちは、互いに愛し合っていくという道に立つことが出来るのです。その道へと、イエス様は歩ませたいと願っているのです。だからこそ、イエス様は「互いに愛し合いなさい」と言われているのです。

私たちは、互いに愛し合っていく、その道を歩んで行きます。その道を進んでいくことは、私たちにあって当たり前道ではありません。本来愛の乏しい者です。人を愛する道に進むことなどできない、そういう者です。しかし、そういう者に、イエス様が力と愛を注ぎ込んでくださり、そこに驚くような実りが与えられていく、そのことに期待して生きる道が、ここでイエス様が言われている「互いに愛し合いなさい」との戒めに応えていく歩みなのです。

・主の選びを受けて

そして、その道を歩んで行くために、きちんと受け止めておかなければならないものがあります。それは、神様が私たちをお選びくださったという事実なのです。ここでイエス様は言われています。「あなたがたがわたしを選んだのではない、わたしがあなたがたを選んだ」と。私自身、信仰について最近強く思わされていることがあります。それは、私たちの信仰について考える時にとても大切なことは、私たちの信仰がどこから始まっているのかということです。当然、私たちが数ある宗教の中からキリスト教を選んだというように思っているかも知れません。しかし、本当にそうだろうかということです。

ある人は、キリスト者の家庭に生まれたことがきっかけになっているように思われるかもしれませんが。しかし、それであっても、自分で選んでその家に生まれたということではないと思います。友人にキリスト者がいたということであっても、日本社会においてキリスト者と友人となることは、かなり低い確率と言わなければならないと思います。また、キリスト教関係の幼稚園や保育園、学校に通ったということかもしれません。キリスト者が記した本がきっかけということもあるかもしれません。それであっても、自分だけの選択だけではないと思います。それぞれが選択したようでありな

がら、実は備えられていたことを思うのです。つまり、既に私たちと出会うことを神様が定めておられたということなのです。そのこと、ここでイエス様は、「私があなたがたを選んだ」と言っておられるのです。イエス様が選んでくださった、私たちは選ばれたのだから、その理由があるように思うのです。しかし、神様の選び、イエス様の選びの理由は分からないのです。どうして自分が選ばれたのだろうかということなのです。

出エジプト記 33：19 で、神様こう言われています。「わたしは恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ」と。ここに明確に、全ては神様の意思から始まっており、人間の側に理由があるわけではないことが示されています。人間の側に選ばれる根拠のようなものがあるわけではないのです。しかし、敢えて、私たちが神様に出会うことになった理由を考えてみると、少しだけ受け止めさせられることがあるように思います。それは、神様に出会う前の私たちは、本当に道に迷っていたことです。進むべき方向が分からない、その中で行き詰っていたのが、私たちであったことを思います。つまり、私たちが選ばれていることは、神様に出会う必要があったからこそなのです。そして、神様は、まず私たちと出会ってくださったのです。そして、神様と共に歩む道へと招いてくださったのです。今日のイエス様の言葉で言えば、愛の道を歩むことが出来るようにしてくださったのです。

「あなたがたが出かけて行って実を結び」、出かけて行ってとは、それぞれの生きる場所で歩むことを指しています。そうして生きる私たちに、実りが与えられるのです。確かに実を結んでいくのです。勿論、私たち自力で愛の実を結べるなどということではないことは明らかです。しかし、イエス様が私たちに愛を注ぎ込んでくださるので、そして、その時、本来実るはずのない枝である私たちが、愛の実をつけていくことが出来るのです。

思いもしない実が与えられる、そのことで思い出したことがありました。だいぶ以前になりますが、関係の教会で、このようなことがありました。その教会の行事の時に、小さな事故がありました。そして、ある方、けがを負われることになったのです。けがを負われる方が出てしまった、そのこと自体は、とても辛く悲しいことでした。しかし、実際にけがを負われた方がこのようなことを言われたのです。その方の直ぐ近くに子どもがおられたのです。もし、自分がけがをしていなかったら、その子どもがけがをしていたかもしれない、自分がけがをすることでそのことを避けることが出来たと思った時に、ああ自分がけがをすることでよかったと思われたそうです。そして、そう思っている自分に気がついて、驚いたのだそうです。なぜならば、それまで自分は、自分のことが全てみたいところがあって、いやなことに出会いたくない、そう思っていたとのことです。ところが、その子どもの代わりに自分がけがをしてよかったと

思っている自分の姿を受け止めておられたのです。そして、こんな言葉を言っておられました。自分は信仰を与えられて歩んでいても何も変わっていないと思っていたけれども、子どもがけがをしなくて自分でよかったと思っている自分を思う時に、やはり変えられていると思わされたということなのです。

私は、この方の姿こそが、イエス様が言われる「互いに愛し合いなさい」という言葉を受けて、実際にこの言葉に生きている姿ではないかと思います。そして、今は一人の人の姿を取り上げましたが、それは、その方だけの姿ではありません。全てのイエス様に繋がって生きる者の姿であることを思うのです。「あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと」、確かに実が残っていく、形となって表れていく、そういう姿が与えられるのです。このことは、今も私たちに実現し続けているのです。実を結び続けているのです。そのことを思わされるのです。

イエス様、私たちを招かれておられるのです。「互いに愛し合いなさい」という言葉によって招かれるのです。「互いに愛し合いなさい」とは、実現不可能な理想を私たちに負わせる言葉ではありません。この言葉に実際に生きることを通して、私たちが本当の意味で愛し合う道はどこにあるのかははっきりとさせられるのです。イエス様の愛に生かされる、ここしかないのです。そして、このイエス様の愛に生かされて生きる時、私たちの想像を超える実りが与えられるのです。その実が、私たちに形作られていくのです。そのことに期待を持って、祈りつつ歩んで行くのです。イエス様は、改めて私たちに呼びかけておられます。「あなたがたがわたしを選んだのではない、わたしがあなたがたを選んだ」、イエス様の愛の御意思の中に、私たちは招かれ、生かされているのです。この恵みを受け入れ、イエス様の愛の中を歩んで行きたいと思います。それこそが、私たちにとって本当の意味で、イエス様の喜び、イエス様の愛に出会う道だからです。感謝を持って、イエス様が招かれるこの道を、イエス様から力を頂きながら、歩んで行きたいと願います。